とある狙撃手と風紀委員

モブキャラABC

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

とある狙撃手と風紀委員

【Ｎコード】

Ｎ００５３ＢＡ

【作者名】

モブキャラＡＢＣ

【あらすじ】

学園都市。

そこで蠢く一つの巨大な陰謀。

これは、それを止めるために奔走した一人の風紀委員とその仲間達の物語である。

動き出す陰謀の序章（前書き）

自分で書いてて一体どこのＢ級サスペンスだよっ！て突っ込みを入れそうになりました。

駄文ではありますがよろしくお願いします！！

動き出す陰謀の序章

学園都市。
東京西部を切り開いて作られた大都市である。
総人口２３０万人。
しかし、その大半は学生であるというのがこの街の特徴の一つであり、最も特筆すべき点は超能力の開発と研究だろう。
科学の叡智が集約された都市。

これは、その学園都市で繰り広げられた物語の一つである。

「……と言うわけだ。引き受けてくれるかね？」
とあるビルの会議室のような場所で二人の男が話している。
一人は、スーツに身を包んだ初老の男性。

もう一人は、華奢な出で立ちでありながら普通の人間とは違う雰囲気を感じさせる男。

「折原和義。学園都市統括理事会１２人の一人。彼の暗殺……確かに承知しました。それでは私は準備があるのでこれで失礼します」

「ああ。よろしく頼んだぞ」

なにやら物騒な会話をした後、華奢な体格の男が部屋を出て行った。

「彼に任せてよかったのですか？正直……自分には彼があの学園都市の防備体制を潜り抜けてこの依頼を達成できるとは思えませんが？」

部屋の隅の影が動き、スーツを着た男に話しかけた。

スーツの男は部屋の隅に目をやると

「いや、あれでいいのさ。私も彼が１００％この依頼を達成してくれるとは思っていないよ。これは本来の目的を遂行するためのいわば前菜なのだからな……」

こうして夜はふけていく。

学園都市・第７学区　風紀委員（ジャッジメント）１５５支部。

「ふわ～あ。今日も今日とて平和です～ってなぁ」

椅子に座って背伸びをする少年……桜姫結城（さくらぎゆうき）は大あくびをしながら呟いた。

「こらっ！何呑気なことといってるの！真面目に仕事しないと駄ー目！」

そんな彼の頭を紙の束でパンッと叩く少女……川端香奈（かわばたかな）。

「あーはいはい。まったく、うちの支部長さんはお仕事熱心な事で」
「まったく…結城も、もうちょっと風紀委員としての自覚をもってもらわないと困るよ？」
香奈がそこまで言ったとき、二人の男女が会話に入ってきた。
「まあまあ。落ち着きなよボス。一応、これでも最優秀風紀委員賞の受賞者だ。やるときはやってくれるだろうさ」
「でもそれを取れた一番の功績は犯罪者の検挙率ＮＯ．１ってところですよねー川端先輩！」
二人の男女……杉本亮太と牧野くるみが笑いながら言う。

「もう。亮太君とくるみちゃんまで……。あまりそんな事言っちゃますます天狗になっちゃうじゃない」
「そんじゃあ香奈。俺は今からパトロールにでも行って来る」
「あっ待って……てもう行っちゃった」
「あひゃひゃ！見事に逃げられちゃったねぇ」
「はあ…。なんかボク、これからもうまくやっていけるのかどうか不安になってきたよ……」

はぁ。と溜め息をつきながらいう香奈。
そんな彼女を励まそうとして？くるみが茶々を入れ始める。
「だいじょーぶだいじょーぶ！支部長の愛しの結城クンが支えてくれるよあひゃひゃひゃ！！」
「い、愛しのってボクと結城はただの幼馴染でそういう関係じゃ……」
顔を若干赤くして否定する香奈。
「あっれえ？支部長さんは結城クンが好きなんじゃないの？」
「も、もう！いい加減にしてよー！」
平和で平和でどうしようもない光景だった。
続く。

動き出す陰謀の序章（後書き）

これからもよろしく！

始まりは唐突に（前書き）

あけましておめでとうございます！！

とはいってももう2日になってますが…。

それでは本文をどうぞ！！

始まりは唐突に

第7学区・風紀（ジャッジメント）委員本部

１５５支部をパトロールに行くといって出てきた結城。
しかしそれはまったくの嘘で、本当はこの場所に今日来るよう風紀委員会から直々に指示があったからである。
何せわざわざ彼の住んでいる学生寮に来たくらいである。それもこの事は誰にも言うなとまで釘を刺されて。一体何のようなのだろうか。

「まったく。天下の風紀委員会サマが俺に何のようなのかねぇ」

そう呟きながら風紀委員会本部の建物に入っていく結城。
この時から、物語はすでに始まっていたのかもしれない。

「ん？ああやっと来てくれたのか。待ちわびてたところだよ。まあそこの椅子にでも掛けてくれ。今日君を呼んだのにはそれ相応の理

由があるんだしな」

風紀委員会本部の風紀委員長室。

現・風紀委員長である仲島弘毅（なかじまこうき）は部屋へと入ってきた桜姫結城を椅子に座るよう促す。

椅子に座った後、結城は部屋を見渡し

「……1年前から何も変わっちゃいないな。ちょっとは模様替えとかしたらどうなんだ？」

「自分は簡素なほうが好きなんだ。好みは人それぞれさ」

そう言ってハハハと笑う二人。しかしすぐにその表情が真剣なものへと切り替わる。

「で？今日俺をわざわざ此処に呼んだ理由をたっぷり聞かせてくれないか？大方、ろくでもないことなんだろうけど」

「ああ。ろくでもないことで面倒極まりないことが起こりつつある、な。現在進行形で」

ふう。と一息ついて言う仲島。

「実はな、頼みがあるんだ。これは君にしか頼めないんだよ」

「俺に？」

「うん。とある人物の護衛を頼まれて欲しいんだ。」

「とある人物？」

「統括理事会１２人の一人、折原和義だ」

それを聴いた瞬間、結城の目が細められる。

「……何でだ？統括理事会の人間だっていうなら護衛のＳＰがたくさんいるだろ。何で俺なんだよ？俺はただのしがない風紀委員だぜ？アンタのような人の上に建つ人間でもなければ、協調性もあまりない」

「まあそう自分を卑下するなよ桜姫。確かに君は風紀委員としてはあるまじき行き過ぎた暴力行為で何度も風紀委員をやめさせられかけてる。風紀委員会の恥で、風紀委員会の名折れの屑野郎だ」

「そこまで言わなくてもいいだろ。ちょっと…力加減間違えただけだ」

「ほう。ならとあるスキルアウトの中学生の両手両足を複雑骨折させて、またあるときは銀行強盗の肩甲骨を粉砕したのも力加減を間違えたからなのか？」

仲島に言われ反論できない結城。

「ま、君も香奈さんと出会ってから随分丸くなったようだし、おかげで去年は最優秀風紀委員賞を受賞したんだからな」

「またその話か。さっきも１５５支部で言われたよ」

うんざりした顔でその話はもうやめてくれといわんばかりに手を振る結城。

「おっと話がそれてしまったな。本題に戻ろう。その問題の折原和義なんだが…昨晩妙な電話があったらしいんだ。」

「妙な電話？」

「ああ。なんでもお前を明日の第８学区での講演会で殺してやる。と言う内容の電話だったそうだ」

「なんだそりゃ。時代遅れのサスペンスじゃあるまいし。でもそのオッサンには護衛がいるんだろ。だったら風紀委員会（おれたち）が出張っていかなくたって……」

結城がそこまで言うと仲島は表情を険しくしながらこう言った。

「いや。その護衛のＳＰたちなんだが…全員昨日のうちに何者かによって殺されているんだ」

「な…んだと？」

「全員綺麗に眉間をぶち抜かれてな。いずれも、一人でいるところを狙われたらしい。それも遠距離からの銃撃でだ。これで折原氏を守る一流のＳＰは排除されたって訳だ」

「因みに…何人殺されたんだ？」

結城が聞くと仲島は下を向いていた顔を上げるといった。

「１２３人だ」

「はあ！？」

思わず結城は叫んでしまった。

「１２３人。一晩のうちに殺された。ゴルゴ１３もびっくりだよ」

「ってことは相手は狙撃手（スナイパー）って事か」

「おそらくな。だが詳しい事は分からん。能力者だって言う可能性もある」

「この事は警備員（アンチスキル）には？」

「当然知ってるよ。当たり前だろ。でもこれを知ってるのは今のところ、当事者である折原氏と警備員上層部の人間だけ」

「ん？ちょいまて。折原のオッサンは無事だったのか？」

「ああ。どういうわけかな」

「分からねぇな。一晩のうちにＳＰ１００人以上殺せるほどの奴がどうしてその時折原を殺さなかったんだ？」

「何か事情があったのかも知れんな。まあともかく君には折原氏の護衛を担当してもらいたい。当然警備員も厳重な警戒態勢を敷いている。それに、戦力は一人でも多い方がいいだろう？君の風紀委員としての実績と君の超能力を見込んで頼むよ」

そう言って仲島は頭を下げる。

「なーに頭下げてんだよ似合わねぇ。任せろ。相手がどんな奴だろうが取っちめてやるさ」

「そうか。だが相手はどんな奴かも分からない。用心しろよ？」

「問題ないさ。俺にはこの能力（スキル）・・・肉体変換（オートマニューバ）があるしな。任せてくれ」

「そうかそれを聞いて安心した。でも、面倒くさがりの君がまたま

たどうして？」

「頼んできたのはアンタだろうが。それにアンタには大きな借りがある」

結城がそう言うと、仲島は顔を少し歪めた。

「あの事か。もう2年も前の話だろ。思い出させるな」

「すまん。それじゃあな。また来るぜ」

そう言って結城は部屋を出た。

部屋を出た結城は廊下を歩いていた。

その時、たまたま甘えから歩いてきた自分を同じくらいの歳の学ランを着た少年とすれ違った。

「ッッ！！！？」

その少年とすれ違った瞬間。
結城は恐ろしいほどの悪寒を感じた。

なんというか……関わっただけで自分の全てを台無しにされそうな、そんな感覚。
振り返り、その少年の後姿を眼で追う。
すると、少年は廊下の角を曲がって行ってしまった。

「何なんだ……あいつは」

風紀委員として様々な事件に遭ったことはあるが、そんなものが可愛くなるくらい。あれほどのおぞましい雰囲気を放っている人間を見たのは初めてだ。

（とにかく今は今回の仕事のことだけ考えておこう）

心のうちでそう呟くと、結城は風紀委員会本部を後にした。

「やあ。久し振りだね。何年ぶりかな？君に会うのは」

仲島弘毅は風紀委員長室に入ってきた少年に話しかける。

「『いやいや』『それは僕が一番言いたい台詞だよ？』『弘毅ちゃん』」

学ランを着た少年はそう言って人懐っこそうな笑みを浮かべながら椅子に座る。

「…まだその括弧つけた話し方してるのかい？」

「『おいおい』『これも僕の数少ない個性の一つだぜ？』」

「相変わらず、君は変わらないね。球磨川禊（くまがわみそぎ）君？」

カフェ・オレの入ったコーヒーカップを球磨川に渡し、自身ももう一つのカップを持ちながら仲島は言う。

「『それで？』『今回僕をこんな敵（エリート）だらけの場所に呼んだ理由をじっくりお聞かせ願えないかな？』」

少年ーーー球磨川禊は仲島に手渡されたコーヒーカップを手でなぞりながら聞いた。

物語はゆっくりと動き出す。

始まりは唐突に（後書き）

裸エプロン先輩登場！！

それでは次回をお楽しみに！！

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n0053ba/

とある狙撃手と風紀委員

2012年1月2日02時47分発行